繁式ア元日祝詞三の巻

みせちは元日にまゐる

みせちとは、毎年十月中の卯の日、新嘗祭（にひなめまつり）を行はるゝ後、辰の日の吉舎に、舞をつとふ処女（をとめ）をみ召の舞姫（たまふひめ）なり。

も、又うくそふきて、みせちと称へり。舞姫の定員一代一度の大嘗会（おほにへ）後世、践祚ごとに行はるゝを大嘗会、毎年行はるゝを新嘗会（にひなめ）とゝけてゐへり。にそみ人、新嘗会には四人なり。そは、若相（わかすけ）実見封事（じつけんふうじ）にみえて、河海抄、又傍書（かたはらがき）にも、しきみにてたるゝことゝ、ことはつぼの新嘗会なれば、み召は四人なり。そは次（つぎ）〻にえらばれたり。さてこの舞のたてゐは、江家次第、河海抄等に、本朝月令をひきて、浄御原天皇代、吉野宮にたゝせ給ひて、神如天降（あまくだ）りて、舞をまひたまひたるに、みたい神を挙（あげ）らる。

（寶成卿）仍従寧おにまし姫のかう捧くなつつそは

傍須ふ行成々とたいひつとそ

なり。それ和尚卿に仍従寧おとゐ内大臣のる実成寧おなる

ー又内のおとの叔寧おなともそこれそなり。仍後拾遺集のそ

詞をそたり。のちふうれ今わ〜ため一さて。尊卑とのうち実成

々うり一人いさし活人なり。その時の装束なとを平文のは方うりてて

てつつそになるへし

（為隆卿）右寧おゆのおせちふつ〜やされなつつそはつけてにそこよろひ

ふたきものはまて。ん紫。梅の枝をーてゐととさうえたり

無津々うも一人いさし活人そのおとのまうにつ〜活をんうを。

のさうさ氏あをひさ〜つさみのかはをうしとおもひたるふさ。とあると同
し〜く卯日の童女御覧の日の条なしなれなり。扨頭さ〜く日本記界覧弘
六年十月の條に丹波守高階業遠朝臣。とあたり。傅(カシヅキ)て舞姫のうつさのために
につき従ふ女房なりおて舞姫をいそ。その傅のさ衣を出りやさの衣
にをそ。暗夜とふ〜とよさまさる頭しくさ〜くしとつ云なりめつ〜
うとは。庵衣に袴をそるいこれをりのみかやあ〜ん初冠をに。業
をを朝臣のうつきにかしさのうさぬさせなりとおさしさをけかさ
頭とふさをなりぬうなり。ときこ申。ともあたり。後ろと織(おれ)たふとは
強て袴頭さぬうちかい衣たかく宇まて云たるさ頭なり。さうさに。分
、ろさ。たをやうなりとなりたをそうなりとて。シンナリトセヌ云なり。

たをい撓(メウ)なりと。非理決解につをなり。尾上人ととは。この業をを。
里て四位の尾上人なる〜(しめなそうさらしのちにふ下会せえて知へ)。さるうさに。尾上人ともとことと
かしいこの傅をかとかふもそうつくなる〜。侍かこうろさせて。とあ
りうさをきこえぬかはあ〜をと。今歌かを。一
かとさになし

帝
こなたかうつさとなりせ給ひてこれらんに。尾さ〜のひてやりとうとに(外)
なり。頭せは。かふまさせたうにうさ。なうさよのは。たけとうとい
くとのいとやいうかふかをきけそれ人かれとうにとさためう氣
こなたとを。侍中の異なる雲居秋の叢書かふ入大師局とをたる事なるへ
しなうさは人の名とかとなりをうつしひあたるをやされ

とおふなりとほのあをんとおうしつきこたをやうなりにきえゆるとふひてこ
ふ又なりとほのはたけともそとふかてそ文はとつたなしうれつく
くもふれはをそうとおもひうとあまりをこくうつしい
うめたるなるへしせきれえ彩筆柔の玉裳の負かあえさしかえなり
さてなりさよのうつきそとふをいまそうへしこうこと傅よのかまま
まそたけよひくくとのふとめるはあ海さの傅よの牙のたけなりこや
ひうは玄ふりやうにて鄙しこのうなりふたなりにに雅の今のふたうに
とそうの人のさためつなり。安とうとふを紫や玄かとに
薫隆郷
右宰お中おのあるつきうきうはなしたりいよ海しのふうとのい
なさ海老さとひたりと人ほ名もなりし

ひすあしこれを傳經のうちのげに女かくふとうい肥太りなりさとい里
ふり玄鄙ひと同しくお中めをこるう海なり傳老もそれをそしま
てぶし笑ふ海なり。ふたりとに
寶成郷
そに玄宰おのおひなしにいまうしくふことなりうしつき十
人あり又ひさしのをにれろしてこほき出てたるぬのつ海とも
ふたりうほふれやつるさ海ともうはえところをうてほうみ
にええをたる

その傍注を今あつためつそうしいおふんつることしたもいなしいこの
衣内大臣の清子にて弘徽殿の女御のれせうとなとふたそし海に
れあやしんうつき十人とそ傅を玄れる負をなにものとそをたり。

宮寅ゆえなくはとうとくて十人とゐへきにあつまりて傳と侍
従ゝ典侍ゝ童下仕棲洗なとにはあらぬ
ゐ一双の女房ゝいとほきふるまひてとりつゝ
つる夜ゝ秀へうたゝ寝の夏のほうのうりそ
これそこれ霖雨よりを名内の女房ゝものつゝにをゆれさやに
ハあつゝそめきゐ三条の霖雨ゝ下信経ゝの渡りそゝ廂
ゝ方にめくらへてこの夜宇おのをほめつるなりさそこれまて丑日
のことなり
とゝの日のあした。殿上人ゐつとなれと月ころにさとひに
ける夜ゐる人たちゝめつゝとゝいとおつるけしきなりさるはすしる

夜もすからふる
寅日を清涼就とゝゝて清涼殿ゝ御て五壁せつゝ
なりゝ筆根源ゝ寅ゝ殿上の闇砕あり朗詠ゐまつなりたひて三
献そて乱舞ありゝ雲客ゝに寅日人数多之時上臈着小葉盤
六位必群居小板敷云と両貫首已下殿上四位六位皆参元是旦夜也近代及晩頭尤非也云々
とゝ御酒のとりまてゝきをうたひなれと月ころ里居
してさひたる殿ゝ殿上人ゐの棄昨よをめつゝとゝよ
う酒なりとなりゝ月ころ里居してなるをゝゝゐそこの殿上人ゐそこの神
事にそこうゐ人ゐもゐゝゝんすれ夜ゝ苑多雑袴ゝ十月中の卯日

新嘗会辰日豊明節会にて、おほにえすれば小忌といふ事を宗とするなり。一代に一度の大嘗会にはとりわけしたがひて卯辰の両日この神事に預る小忌の人々は、みな摺衣を着るなり。（此はら将神事に預る人々のうちに小忌大忌といふあり小忌は重く大忌は将またこの小忌たる人摺衣を着るに摺衣をやりて小忌とも寄には小忌衣ともいへり）さればことはめづらしうもあるげし。きなりしれつる小忌かき殿上人どもの舞姫どもになれめくさ様をとりそへせてしるなまめくをひとへ寅日にていづれも摺衣着るもなしそのころそらく摺衣きん卯辰の両日はさらにみるかげしきことえはなくしかるにこれはなしこれほとなれそいふ定なりあとをさへうちそへけりさるは、然有るをめづらしうことえへる語をうけてかしはくとぞらしき釈する詞なり。

新嘗つ事のそくらた

この夜さり長恵のすけめしてたきおたがひにほどもやかなるはことぶたりしれさせ給へりなりきへはとのくうつ殊にはかなしけるこの夜はたまへのけふこそとりうへ小忌たらせ給ひてれらんにぞろ文たもしめせはうち満ぢしみしるづ事にことなるおちぢに

春宮亮侍従に式部の継子隆任なりとれへりたきおなす人のをいはさ此隆任小将ふかうに吹ゆれとさすにえおほしそ侍え殿小をそうへはことよ御いみ御前にそうけのそま給ひるをんたしたれそとのくうへこそ摺しれえつかはしけるよそでなまいそのみ前へはかそになるへくかすこと宗兼隆々の五前小をたき物色しもへるされそてれそれ使のため兼安亮なる隆任をめして長文大夫なる人此の御前小竜になるへし。そよ

しい初冠に又なう〳〵大夫れ名乗かへうたさせものつうそれた
ほそやかなる声のそこにいれさせ給へりとにてきうへし・さてこの書文実
はおそれて此四人のうち兵衛督なうへし・別人としては雑仕栄栄の室真にかなそうれはなり
ふりつくれたそこにおう佐宰相中将にかしいたき拾をこ
もうてるへく・宰相中将の御せちかうはこ一ろういにたさせものいれてとろこにを
ちうへはとのうへをつかいしけるとそて四本のうち業平朝臣のかきへ〳〵うそさそれは書文
ちまはこ此丹波ちの国宮なるこ〳〵られうさて書文ちまお前世に伝か
なれはかへに反上人おろろふもそう〳〵はくとんへ御かさなうくうなへり・花のへのかろを
それそち寅日のうへうかたなう〳〵せいに帝清涼殿か　う〳〵せをいして御覧する
なり・作うへうかのおそ・衍なうへうとうとそ帝を
やにになうへうかとふへそ帝それつまかさせ給ふ御座をいとなしなり清涼
座にそのうに侍女級その松をまあかうへかさうふれ猫そんへをうへ人
とふをこれ帝此渉例かあるとなるをそうへ・といそれうちう

まことのをおかそうつまかとふるそをさなき若きをねそ御てうか
波なとすうき海をふ
そのうけれはおそやすうひおうさ海かしたりいてあうんとねも
ひていたふこひうおこそアなとをすいつかおていせそけれそう
くうねこそ先給うになとい注とふ度なそ御てなとを
うってすくうとはあるふいさそろとにとめたてさせ給ひてんか
そのうに海のほりなり
そのうけそちふいおさ海そやウスなうまうんいたあへなういたるかい心
さなるかのそを着さしいう云の法をとつし家の人をこれいてとろをたり
もたとふいはもちうおをおそいう帝なれと
いそうはいたとうつ海うをしそを乃局へいをたなう・そ花ねかたる

在京大夫みたる娘をそのタつけてあつせたりとそたおとをたく同し
さ満なり（在京大夫いおゆるは尾張守に任ずるにて尾張守の事歟のみちのあしく
なるなるうてそこをも通りてあなたへいぬるなり傳守のかの傳法も勾ふ
みやさしきことなり芙の声にそこの事歟のみをくさうはをけさうし
てほろいたて気れるをとゝまぬ中はへにあうそたあうさ満のん
とうなみなるを伊の佛尭うう世中の云常此とうなをだれもひうはへ
なるへし
かとそてくだりまを注しぬそのころ此もんたちはたゝめせちところ此
をうしきことをうたうすたれのそうさへんくにうさうてはてお
たうらうつきまてなしげそひなとさへさうにうらそくしおふくかなん

あるとうさてにくうたる
かとそてくこれ承試のことをそうて帝つきのれ方にうてせをふなう心せち
ところ江家次第に次還所西南角五節所者ゑゝ西北角五節所者
ゑゝ東南角五節者ゑゝ東北角五節者ゑゝと東南東北の二所ハ西南乾
るうそはたちたうそて常寧殿の妻北西隅小合人の妻ゑの某ゑ宿雲居秋にを
うふ満うけしたる画所のう角をかたりあふなうすた水のさまを画所
にうみたるをいふさてすたれのそをそうはを簾のそをそうはを縁なり
ふるう又簾にみ物へたるをするしのそをそうといふう帽額といふそうい
なく後のもそなうう車服制度手記という書小帽額ハ俗ニ水引の支ニ
候短キ幕ノヤウナル物ヲ申候鴨居ナト高キ所机ナトニ引候ヲ帽額ト申

候。江家次第曰、元日宴會云々。垂帽額舞臺ナド下ニ引候ヲ、水引ト申候。是ハ船ニ引候ヨリ出タル名目ニテハ有マジク候ヤ云々。畢竟帽額。水引ハ高下ニテイヒカヘタルハカリニ候云々。錦ヲ用候ヲ錦額ト申候。簾ニモカケソヘ申候云々とみえたり。古のほかは江家次第新嘗會装束の條に、構二立舞臺一云々。其東西北面懸二垂帽額一なとみえ、又枕草子にもかりのすはすてこそ見もおもうちたるこそしきしをやおもしひきあけていりよるはきらになりたる。又夜のまかりのあさやかなるすのようらんのをたかふ文をいのまかりのあけたるなとこれふみえてたるら御簾にかけそへたるさまにたもそなりておそきとよ。識者よくしあきらむへし。心をにかそへていふ所、一本になるにたかしくふかきしてしたる方なりけおなるさ、斎姫をそしめ信従もののさまなりき。一にたるえにいきにく

かからえにまて信従とものありさまもたかへかからいたるもののなきなりきさふらひてにみえまてるわりなき有を公達の御かりあふなりかとかくておもまハ今の世をさかしなるものなりき、これを寅日のことなり。かそおたる紫式部おもいたるところかそえて斎姫の信従ものを率[ヰテ]ておたるゆへしなるへし

うらぬとしたかふれらんの日のうゑをわかちともはたゝろかなしうするものを。おしてれうなしうんなと心もとなくゆかしきに、おもふをなしれてれてさたるは、あれなくむまつふれてほとほしく、あれさるはとうしみえてふうりんよにつきあたりとなしうし

うらぬ年なふとはおふにえうふいとなむつまのとしらうとぶみ渡した

もはらけちめとみえたるへあれだにうく。くもりなきひかり中にあふきも。
そのかくしくえたせにそらるきんたちの立まじりたるにさてもあ
まぬつき身のほとんとちれと思ひなり。今はたとへしと抄り抄
ふかくちるをいふにたくらすらんと。あはれなくふたつるれたさ抄うたくな
しきや
我もくえたとらしまけしとほそ病なりけり。心たらは人くらうり志たて
いたづる信従ともなしめるつりてそメウツリシテといふと同しけそ氣にて。
たとりまさる此ヤシスなりいはあらしきこと今世のさるる人の世にするをそ
おとろきはあらのけちめとみえたる僻あれ我らくさたすた移りなる月にそそう
もりめけさやかにとみえてそうほとおの花を文字にことに加へて見えし。見てそ

うほといふ所ちかきをとろりて。木のつらなりさきたりける中は葦原覧八日のう
ちにあることおふに似り。扇もえこの陰従ともにもたせぬなりこそ身し次ぎに
へりさてもえ抄らるの京の立派しまたる中にを施へ見るしらはる
しき陰従の身のくる係とんともちひをあるなるとなりさてもそツノてこテ
大井ブンニといふほとの意なり。今はいふにたくらすらんとは云年まてたる云達
にいふにたくらすらんといふ意なり。他の信従におもとしほとのんつらき王ても。
よ綱をえさくたるなりと経本義いはれなりまでそん中を去ふして是はあ
はなくえとなりうたくなしいやくなる人のうへのことをかくゑふしやりて思ふ
はグチナといふ意なり。　ふとのふもし年にかなし。紫かの実やにそなとは。
くもり紫式年こもりとは。　そち年らてろとは

たゞのさまにそうそのあをみのうさこをうと思ひたるを。實成
卿
相託うそ。あゐいろをさせて。こゝ
ーさたる。糸たけなり。うそのうたちを。ひとはいと濃ほこと名を
丹波ちそ業まなる今ー。ちふんのうをみ。紅をほに白橡ふ
二文あり。あをき。青文。あかき。赤文なり。と名たりさそ。あゐいろを。赤
白橡也。こゝは汗衫なるへし。さみそ童女のうへふきてなり。水干のうみ
ぬやなるもなり。と湖月抄の長篠にみたり。こゝは侍従も今あるなめり。
ふまつのそ。陪従のうちなり。あをゐ
また。湖月抄表ふまき名そ。麹塵なゝをいふと名て。青袍のまうち
ぬもぬなり。按ふしを。庵衣にて。名たるを。称たけなりと。ふる
うゝとのをまをなをのふさしふと。丹波ちの陪従のうへふ引うへて。
仕の身ぬほとをて。麹塵なゝをいふと名て。青袍のまうち
なり。ねうし。うゝしなといふんうとく。丹波ちの陪従のうへふ引うへて。
うゝとのをまをなをのふさしふと。あの文のまうふ。ふと。まきる。まうに
も。文ゆまきと。庵衣を。まてそ。ふるうゝとは。神祭まに。ふもつ
文のうゝ。衣ふ。あをんろをさせなほとねーうへ。称たけなりとゐけるや
すうふそ。吹たるさそ。六位を。蔵人なるは。まうーさそ。枕草めてたき
も。ぬ條ふ。六位の。蔵人うそなほめてたる。れいうー君まなしふと。元ーと
ふ。ぬも。あやまりもぬをんふ。ぬをんろすうたなとふとめて
たきなりとゐをうそ。称たけなりとゐをふ。ふうそのうたち

もろこしの丹波ちの皇女のうち此一人をいつるなり。さて丹波の皇乃
まろが曲掾をうしとおぼしたるふそしかりを藤宰相の酒さそしく移さけ
なりとおぼして夜宰相の陪従よもおぼさうならしなしかくうそしかう
ふれて丹波ちのうへそれうちふ一人て酒保ふとえぬうありといふかう。
うたちもとんでるよ。のまにんをつけてえへ。おもてうふきてうさしとたてこの
くも文まひうつまて。しうらくまたなふ。ふふー人へ乃うちおをいみて文の
さ入上まなしそなりうさ。有きたなおそはいうなをとふんをとめてそう

へきこと

蕪隆卿

宰相中将おそうは。ふとおひやうふ。うことをうこれうおまてめて。
ハきハんさなりうさみそ也へなる中小をそりえたえひうめをさせたり

蒲萄涂

髪

たる

おひやうは。対の長の庇うく。ちきおをみたえひうめをさ。初至。まに宰相中
おのをんへうふきをそうえ。えひうめをさ。三まてうきさせなとあるをえれい。め
まの汗おふ引たうへて尾張ちのそ三のえひ深をさせなとそえひうめいう
さうさうてゆるくくんあうさ酒まて。勝れなりとなり。すられなのうこと
ハまを深れうえずくふなうなてにをそおて
なるへし。 也宰女人とに。 新中将とに仕のう庇とうことをし
あうてそ。おうのそされそ。今なおふられ
あうをとうとて。六位のうう人とも。ふんとなけやうて秘。やさしてうその

う〳〵ぬかそあ〳〵ぬうとえ申れ
あな。侍女の奥なる。部屋雑要抜か。乗脈と。言ふあるうへ。えてゐなう。検
あな人〳〵。それを。尼人のうちそ。ほうそもく。衣の袋のこのそほうを
うそ。なあ〳〵とそもたきこれそ。壮衣朱のうち。式一種なれそ。さてとゆうへさを。あ
にはあふさを。まうくしくもたせに。とあるを。尼。侍おへは。ほうとそ。れ
とうのうゆやあ〳〵んまは。半。式。尼賢ぜんか。はーうさうなとーてそ。尚き
そうよありてうほうるうち。あうう尚なとの。だほつかきうたとおれそなうへ
しんとなけやうとは。尼人のとふうふうるかやうてそ。そを。えて。我ん
とうてこれうりなけやうをんしやそ。今いと。同〳〵てなけやうう尚な
り。おかそ。なけやうう尚そやさーきとのう〳〵。ふえうけか。我んとーて。ふ

けやうそ。おやうふさーすた。れ。ぬ〳〵うなーぬう尚の。女のなたーてうをあ〳〵ぬ
を。ぬり。
ん。と。歌かにうる
うれ〳〵をこれるやうゆて。ぬそおう
そうう。お投そーこうう尚て。たうんてんとは。ぬひみこやは
うれ〳〵。武部のこつうをてふうれ。彼輩(かれら)そ。になう。みそうろくん
つ河なー。又とうことぬーれ。悩後を投く。ぬり。さてそは。サウデモおそ。おふそあ〳〵ぬうとゆうにおう
てんつ河なー。尚うひあうそ。うそく。当さなー〳〵ぬう尚をいー。おのうえ
をとうすてーれそ。おふ。おそあ〳〵ぬうとえ申れとそん〳〵とをさ。我〳〵をうれ
うらやうゆそ。こうう。侍おふおうらとあうなーは。うまー。を。ぬうくろー〳〵をたま
と。サウデモ。我〳〵なとそ。ま尚うひあうくそうう少をあうこう。となう。こう尚

てさ、加えくおそ弐ねの今の身よりうへをふつ祠ゆて、葬姫のうへつきなとそさ
らわとのさにうまへならいてんとは、ふひうみきうきとふつなう、そらひいほ
ふ弥あ〜ぬ今をふひあそ〜なまそ、れる 弐ねのあろなら、といまれなり
されとめふえにあき海〜きもれそ、人のんなうけれそ、今ら〜のちれれ
まなさは、たくなれふなれすきひたてきてふなへんまやすし〜うし〜と、
守れありさ海のえの要うふれもひつけられて、ある海〜きとふさへれ
もひこうまて、ゆ〜〜くれ庄ゆれいめと海ことも、まんのなろうくう
されとを、師そ、そらひそほんなへぬらーかそふつを、人のんそめあえぬその海
えこうそうことれうてく、今ら〜のちれてもなさは、なれふなれすきせをの
くまんとふひうなとそ、すれきてくそらひうこうをきふなへんまや

すーうとうつ云なうとふれうう、分のあうう海のうとそうのつまふ、ふうく
れもれいうた、仲のうたをふうをすれなうつ、師そうてふうとふつ。
うたうをうなるを、要のうてたとふつ、師そうてふそ、そのえをれいんれ
うちふ、ふひてくうとそ、要のうてたれほゆうを出う、又ふうーうとい、
そらひのひたれもそふなへんなとふいさはあうそーさとなれとさう
れとうふ、ふひこうまて、ゆ〜〜くれ海ゆれいふつそのてくはふひなう〜、その元
にそめとゆ〜うくうとうふうふ云なうとふいそれう、れなうこひたれもてを、
要ふふつ、ゆ〜し〜うとイうくもキうたなう、　なれふ数や年、たれふとん
やすーうの上ふてうてう〜数や年、たれふとん
実成郷
侍従寧れ北みせちのつほま、その元のれもう人のたく元をたんそうなう、たて〜

とみえてこうゐてふきくすてまえをそ伸人死をのびてふをろこ
ほのきこゆ

おの傍注を今あうなう文
そうはんとをきさ面そうおとふきくとえうてらうすれたる面のそ
に笑しなう歳のそしておふすたものそうとさえてあそはし
とのこ兵帽額をこめうへきや

この女性のれうたふ在系う面とい人なんがなかて面しをなと宰
隆卿
お中おむうしえしまそうたなを在てを一枚このえほらられおてね
たまし、いんうなまなハ在系と添かおえしたまをえ
今たうあうそはたへきたる人をうこうもありけるれとふひて坐

おうこうをおえあうしむうしんふくだちてえなうしくんうちそ
たりをこうさ面みてやそ仙てたほてきふのふとやうしんをあうそ
さんれんあて、

この女性そ接給業集に中納言宰相おしまたてをつけふぶうう
とふ弘徽度の女性のとをさきこれ女なう在系う面二人のをうふか
きこ申おと打一人なく しきてこの女房むうしの女性の代方ふまつこ
てかをしをいをそうをかうそこたひあ系う陪従ふれてむうしのゆうう
ふこの女子のれ言ふれくしうまうしまなを若々のえしまてし
うくと申あ北如房まに渡りなう一枚を更衣面おえうちなう
えつくろへそ東舞姫の装束なとをえつくろひのなおなう、まつつき

そふ内とたのめけえひうちつけかまくらの日の夜のでうぐ
ハけかをうーうう多まやうなる廣上人なとゐふなそうつれく
なーん

ひころそ世の多ノ廣りあそうまてをいふうちつけかえサシアタリテの名なり
けえひのやにそをー抗するなへー。かてこの日ハ卯辰巳日のうちてそ辰日やや
あーんそうこうハ次ホ賀茂の陳明楽のとそなるそ楽れ調楽なり調楽
ハ試楽と同とおておなりーなりまてこは河海抄ホ臨時祭調楽十一
月午日ニ於北陣ニ構假屋ニ有伐式ニ有饗膳勧盃等ニ拾芥抄ホ十一月下
未日賀茂臨時祭試楽なとえそたふ廣日の夜ーを調楽乃
あるへしハ午未日ハさはるとなとありての夜なへーされをうくるそハ辰日の

夜舎の夜ーもありてこそふうくをこの日の夜のでうぐく
ふとえてそ夜舎の夜を調楽と出しーんそにをゆゆしとふそうこの夜を
調楽とそれそん陳明楽の調楽なるとは倫なそものやそけかといふてを
うーきをのふーたるをうえなひてゐそをそ。まての様
にいそとおてアてりなり
たの松のこさんたち（公達）へこたをゐりせ時ひーまうは女房ゆきされ
て海をなくとほりあるきをいてそれとそしたなけなりやさたすきぬき
をうつおてうくろつる。おせちこひーなとそことふれおやひたるに
やすーふふそ朱なとやそのをのすをかさふふまつそれてうさこそ八
やうにさへつうされたれすめる

たうれ。ぬなの傳注ホ明ならず。西宮九大臣高明左のゐむすめあて。
ホれくらて。道長公のうをなき。ふこのれうう
うへうみうせはひしゐ取うなり。女房由うさ。ふてとハ中文のれ宮ホ女房のう
たき届へうせはうとなるへし。さるとこのうを中文とそとれうへうのれ兄弟な
しゐて。はうふれゆうしをうひていゐ
傳をなくまて。おうく女房のあうたをうひはうなり。さるうにうときう
たのうまなしゐ式ゐのうたなけホ心なり。ううハうまうれて功なるへし。若紫巻
に。うしたる声ゐいとゐてうすきひうめうをあうおくうつきてたらふうみたり。百
番某ホ。このうろゐうそひちうへうまう あつかくうにまをさはこめのうこふり。な
とうたうとうと同くて。おうなるへし。さて若き女房まを抜とにた

さて。我いさたすたたうを功にーてうたふうとなり。おせちこひしゐまに傳そ。
うゐホのホうまの小うまのうさ傳をふーうなり。中文の光とう女房たちのめつーゐホうつて。
みやの弁姫を。ゑーなとも思ひこうと。宇治にも子ひかを来ることうまふふ
とめ姫のてそのをたうとすすめうまにうまかてそれにくゐひてさゐゐ
うとうつうえなり。そすすめうまにうまうとそちうくうりゐ姫ふに。ハ
つうとそ。それにくて。そゐとうふをゐうつなふたとなり。ホうまのうふ
さうふいさ。てのうをあうまをなり。 歌中云。さゐれてうにめる古り

傳明のをつれはうひそとのく神ホ君なり

傳明ホ六十一月下の酉日の賀茂の傳明ホなり。四月の午こむうこホ
をハ傳明ホとうへし。ホ賀茂の大作
神のこそゐひて。寛平元年十一月うれてしかう。ふ酒てこ書ホたた

りて、いと十月廿八日ぞ、下の酉の日はありける、神事おほく、殿中の物忌おほく、教通とあふらへしをかれこれ後拾遺集に二条、前太政大臣、中納言、参議にとみにえさだめざりけり、のち太政大臣正二位にいたる、二条関白とよばれき

其の日それ御ぐしなどは、屋だてのかせさを経て、うへ人たちをこころうてゐ、ら一夜、ほ其の日は、卯の日なり、御ぐしのこと、二の宮にぞ、ゐ人、御ぐしのなうい、人、内裏にものすることも、帝、本、半に、ら馬、ゐ、花式部、歌、ものをとかれりなどもきこえなりなどもきこえさせたまふ、ゐ、東のよりの初夜さに、うそぶきの糸になりぬめり、其の日、内のれくものをなしそ、ものを、

うんたちつてをまいの君たちをこれらかこうぶりてとをなり、白一束、

おふいつ

内大臣

ほとゝぎすうちのたはんとのつけ給ふ、このとのとすゐしんかさしとゝぎすにけふあすとそこそおふたふ、ゐこうのさうしはこをすゐなりかこれ

沉

ふまでちんのくし、白うのうこうえなとつうれの君のびんうせ給へ

さびしきをしたり

ほとゝぎすあしたのふくまを注とをれよ、内大臣、いと春ふにて、実成々、弘徽殿の女房なとの、文なること、おにせ仏、あすしそこは、おふ、寂なとれしてこなたらつつうれ、ゐれなう、そこふ、この枝くのものをれして、一日の夏ふにれこせたなう、まうしそこは、草ふをれよりの物をれよ、うう、れそ、君後ふ

て和名抄に擇髮假所以理髮云々或曰擇髮和名加美賀岐と云てこゝろをやうてしびんをそくと此字さてこの鏡櫛擇髮の三種いづれの条に使の君のこゝろにつくりあんばいとゝいつるんやてそれてせたるなるへし

そこをふたゝあーてにうちゐてたるいはけなめり

ちてあやふし

そこのふたそうのすゑたるさうし笥のふたなるへしあーてい杜の意象この笥にかゝへしへ

汗葦多のやうをいろく考へてこゝろをとゝろてい杜なる俗と

もいふさやうなるへしともなりけきはおかれ有るたるを要しさま画いこの書をえてゐるへしうち出てたるといふふしたるにあんおかをゐるまのれ衣さこ

ふふをうちゐてこゝろをたり図さ画なるへし和名抄にそのそこのうち

にてゐるおしをうたるいはけの意なりいはけの意をといへるさはうけとよみ

しとおもはれたりなかそあるへしてこの意の和名抄後拾遺集等に見えたり

りさしとおもひそこふたつれちてとゐるさ画なとゝ杜の意象を見えらくへきさの

ことのんたうゐてをあるこれと見えしいう杜てとゝ乃意ならうとゝえ

ひてうくしくおなし意つなゝとをきりしいなうしたをふれをさをれとゆうとくしうて杜

ことのんたうゐてをさい年文の女房ともの一時のたをふれをさをこゝろく意乃

のれ給りぬのとくくしさをいふ事まうのれとい
ておの給りおい女房とものしさなるをも事ろそ中宮ろ給せてなも
ぜとれほーてそろてかかる中宮ぜれそうなる教通中納の
にうくとくくしくこれしー給つなうと掘ぶ吹ーなう。あうれとろそーは
さて給うーとつくえかう後拾遺集にあるーそこのふたうなといま
てつうれそ中宮のそうううなしかそやとろたう。この文を傾なに
たるれしことなう。それむけかぶ吹ぬとなう。さておの給りおい女房ともより
左京君かとそ。巻そしこれそ。左京君かとそ。巻そしこれそ。左京君かとそ。巻そしこれそ。
ろう。うくしー給つをは。これ京のうえたる男のこうのともをかうろ巌屋の女房は
いらんせさせなこれ文のうえ給ひてこれそ中宮ろう給つをたるもの

とろそ給ひてこのれとろ乃おくくしくこと
ーうい給つ事ぶのれんをちれしさせ給つほとをふとくくうう給といおのとく
ーきさ面なるをうけてけかとくくしくうう給ありうれとい云なう

倫子
とのうへも御うのほうとしこのれらんにはうれの君ぜ参うさーしれとも
おくくしくれとなびき給つをそうろうの令婦かまひ人かぬめをえうに
ちょをうくく拙なうけ

夜うさーて。乱を飯持か源ぶ紫の掃次侯爵。藤人楓。信従。山次とろた
ういれもつうう給へーれとなびき給つこの君長徳二年に生れ給ひてさ
とい十三ろう給ふれさまなう。くうの令婦そこの君のれ乳母なう。初産ぜ
にとのうへとれそーぜせいれめのとの令婦もをうされあろひいめをつうて

うへのきみをいとふかうなさせたまひて、かへし、さるべにこの君を、
いとかうしてうちまもるなん、ふるき目守にてさしく月
をこそとてあるを、
これもの心なれそ、ふしろのうしの時あはせ、うまなれそれのくさ
ことさらに、まくり帰りたるにもさこそ、やしろ賀茂の社なれ
くさいこのふる、還立の御神楽とて、賀茂の社の後まで、うまつれ
あまてる神楽をうみなり、江家次第に、入夜神帰参、有神宴事
云々、次、人長申請可勤神楽由々、次、神楽、次、歌頭神時、人長舞
云々、次、人長申請可勤先張由復座、次、先張終、頭歌朝倉曲、歌人歌
之、次、歌其駒之時、人長立舞、西遊に同じ、なと、ものくさしこの還立
の御神楽れ拍子のなうなる、ふるき、逢くさへうり系りたれそ、あそうとな
す、西宮記に、両日御物忌無神楽、雲客扶に、翌日守御物忌之時、
或止之、宇治當の係なりとも見えたり
うまとれる拍子をくしけなるをこらなくにとろへた
るまひそ、そーうまを人うへなしとあれかれそひらはて
ることにほく作る
うまとも、侍従ふ人の名なりとんて、この人云年、今年、この春の夜ふあつう
な人と吹たり、こらなくにとろへたるそて、我身もさ秋あるへきと、ふ

主翁、歎て云に
我ゆうふけふ久うれ物いとにくれそ（中文のこと）
にんぼはくてうちふーたるふ、主人をおうちをたり、枕れとけそ
ひことなり久うさとにてそれは、称を沸ーそのをさをさとなく
つとーけさうれとめうーくれひみたるをきて
とーうれて戒らふけゆく風の音にんのうち託すき沸ーさ風
とおひとうたまー

うちたりいさ式和のおみる女房のとう知なりさとそれきたなるのう〜
おて、月のさやすれをいふ、和
おーけれふ月のさやはさなう、枕草ほにはそうみるいうをう、〜

主翁、歎て云に
我ゆうふけふ久うれ物いとにくれそ（中文のこと）
にんぼはくてうちふーたるふ、主人をおうちをたり、枕れとけそ
ひことなり久うさとにてそれは、称を沸ーそのをさをさとなく
つとーけさうれとめうーくれひみたるをきて
とーうれて戒らふけゆく風の音にんのうち託すき沸ーさ風
とおひとうたまー

うちたりいさ式和のおみる女房のとう知なりさとそれきたなるのう〜
おて、月のさやすれをいふ、和
おーけれふ月のさやはさなう、枕草ほにはそうみるいうをう、〜

ひうれつ〜とたほーとなう、えーうまーさはかケカてとノナイとふ云なう、
とそ本翁いそれ小て、さてこれ小まし、賀茂の隊ぬふのとをうけり
志そこの北九月にまおう、そーめてまおうーをこうしのことうろーれうく
も、翁ふれ小生とそれーうれと、これいれいつまは、こうなくたちなれかけう
を、うとあーれ男のほとや、とれほゆ
ふふえたる隊ぬふそ、といふ十二月七日なること、すとふれり、さそのち日ま
ーて里にありて、ほとへて、久ふ十二月七日に中文のれ言にまおれるなう、は
ーのてまおうーをそ中文ま仕のうめは、寛弘三年、十二月九日にま
おれるらーーのまに八一り、翁ふうたの宅沸ーぬをたとーてれーり、
たちなれかけう、中文のれ言にまう、うと沸ーのそ、俗北佛云なう

そし。今せ下らゆきて。おほらの来。鬼ハ外と以ひて。萩をうち落くは元遊戯のさまなり。萩は元ふ見ゆ。なうらちほきの来ぬうちほうひたつものなるへくたをそる。そくろめハ。鉄

漿出て黛をそむる法。今と同しかるへし。末摘花ノ巻ニほとみえたり あてき侍中に童女の名

と見ゆ。義紫ン宮にいあさとら童女も見えたり。うさ妻も。ひきうと衣にあるも

のなりなけしのと。松の屋繋ふくそしうなそう

れまへのうたふいみしくおもしろきなんし日侍れてせとよみにはさなさは人のみなさ

そくれとのきこゆるに。いと中しく。おとれはえは。ひりと出へとさふそあう

にたそのなかさくときらふれし式部をいふなて。とそうらも。笑しかふたそしまは。

まろあって見えまうしんと。内侍をあらてふつきれたろうて。三人ふるく

あしをろしにて。まあうたきは。えたうなる人縫ふなりぬたる。ゆけひこそ

アなりなり。うくなりなりと見るに。いよくむくつけし

とみにもたきほえ。キフニモオキヌなり。ひると出ーと八。失火ると出へとなり。とたうう

もさ。内匠君の詞なるへくそし。まろまあってさへ侍りり。心中ふれそしきにとそ。こよ

ひらへ似これよの中をきりのほり様さん何かれそしまえをて。下にとふなるへし。

うくなりなりハ。言りにてありなりとなふてなろきまうふを来て見れし。その二人

似裸體なるをうるりてありなりと云ふ意なり

御厨子こつし家の人も。えん似て。家のこふうひも。たさうちとなゆうハまてける御

階ふ。えん満ンなてけり。えをたうき殿しれといふへする人をさし。御膳宿れてのや

とう似刀自としを。まひ似てなるふ。座上ふ云ア丞ーと。そうくふやくとそちを

ますれて。くちつうられひたれいたつまるれとすってにろうふうきことう

なりなし

これやてことばきそのつきを有ける人女官なり。
屏風ぞ師ろくことをよみ給ひたるとしの冬ふみ給ふ。
なとゆふ人をかなへしらへくとりつゝをなりそちをとすれてくちつゝをよ武
えいれをそうのとしなふくちつゝをものつゝきをふあら孫とうゝさゝ
きのをうかふそちをとすれてくちつゝをなりといれたりつゝしはか
ナシイなり。　ミア巫とろう人実平年いふといふことなきにる
武部巫すけなり他よりてところくのさしあふゝともたくひとうさしい
まゝれてありく人ゝをのれはえにむうれめたるをあうへうれつ
ひなとあうんをうれをろしうよ他。仍ゝをさめ納屋ふある此他しこ
をせさせて。この今にはふ。ほんたたのさうよくいとゝうふれさり

けをなくてあれとそたうすうたそまゝれおろしきものゝを
うしうとふえにことんをもしあ
さしまゝれてさしい油をなりのまゝれていんゝふしてさしありくさあを
いふは笠たちのまゝ西月朔日のまうよ他装束えとしまれは今ゝふしたちをさ
しをとひ笠たる西なりてあるなりそたうすうたそまんとをうふれとこ
ふゝおにていをうとも。いまに。またをとのおれおろしきさのなりれ
おろしさのあをうにそよふをもしあてをれおろしきとはいひあうと
ふゝを。仍の着てみしうくうたり。とんをとは明の年のちめなれ
は。神しきとなとそ。笠てやあををふ。ざと上のうたうの盗人のしことさと
そなり。日本記畧。万壽四年。二月廿八日乙卯。今夜。殿上口。竊盗。剥取

主殿女官衣とてそとなり。そかゝく物ゝことなり
正月一日のうんのなり。それはさう云ふ
物。酒うの事ゝせ給ふ
寛弘六年正月一日の夕。坂日記。これをみてことと
するをゝなゝさゝれは。それをまして。当のにうへにの
ぼせ給ひて。そことゝいまするなり。餅
元服をそうそにゝゐゑ。餅菓餅にそく。小児戴餅事。玉葉。兼安三正一
余向関白第ゑ。當腰之小児。為令戴餅ゑゝ。主人召顕信朝臣。令抱
出小児ゑゝ。民部大輔魚定。取餅。件餅入手笥蓋數擅紙。在橘尺
起取餅。午三牧取之不取蓋令戴若君頂上三度ゑゝ。兼元四正一有小児戴餅事ゑゝ。余
直衣冠也。令戴之。下蓋取之。祝詞。官伝カタ。女房一人抱児持餅。蓋一人持匙。先
取餅令戴。余幸カタシ。餅三度當頂畢。則以蓋返給女房。次取橘。觸
児頂上。長押打揚。三成橘三枝尺九也。次第如此三度。次取大根。觸児頂。詞皆如此。
畢又打揚三筋ゑゝ。手管蓋ゑゝ。數紅薄様二重置之。橘大根同入之ゑゝ。
三ケ日料。橘大根等。入折。櫃献之。次不改装束。見歯固如恒。とそたゝ
ゝこれを宮中の若君式戴餅のさはなるをゝなゝゝて。若きのをゝねひや
りまつへし　と海人藻屑や一平にらん
ことのゐそなひそ大納言君。さう称くゝほいたちの言ハくしなゝえひそ
めうゝきぬはあゝ女。北すりの唐衣二日。こうえのたりをの。こんをりは。
てこゝまゝ女のうゝ衣ハいろすりのをゝ三日ハうゝあやのはくゝこのさゝうゝ

さぬ。すそうのおりうえの。えもうは。こえをうる日ぐしなおそなふ。紅
をそる日そ。こえをなふかをと。まえんのことなり。もえき。すそう。お吹のこ
えうすき。そうそん。うに文なと。つく秋の名をひとたひかむつそうと。
うそきとそ。れとさ面うえほとふさつふ
れ上。大納云云の装束のさ面なり。さしと。朝日。坎日にて。れ戴餅のとこ面うたる
にれそうなひの如房の朝ひうの装束をひてそ。とたうそうなしと。三つの
をうのをいそとそ。れのつつ。それひうれて。年の后の朝ひ二百の装束をも
れつなう。ふまうはこえ。とうそて。禁のことをひ上なふ。皆練のとおふ以
りうに文。侍かに。禁のうほきをよとあう。むろそうとそ。もえき以下の云を。
一度にとうまきて云なをひふう。識者ふとふ。

ふんしやうの君のれそ劔とうとうとのれたきまつせ給つふひつきてはうの
ほり法よくれなの三みをくとまでて。れなしあれうちたせつふひとと
をぬひうきまくまでて。うへふれなしいろのうたをんのあへうちき。えひうめ
のうにをんのの檀のうたきのをんをおりたなぬひうあへうとくし。三うき多の裳。
あうえのうく衣ひとへのをんをおりて。きあをれとうくめれたりれとをう
しけふ。うみなとも。つきうはくそうたれ。もてなし。うふくし
くをうに。たけたちうにほとふ。ふくうのなる人の。うほれとこ面うふかほひ
をうけなう

れそうとうて。ふきて海うの浮うは。係ふり。れたきまつせ。君ふをな

り・うつくしく・はなやかなり・ふくふくしく・功者なり・ふくふくしく・肥たり
たをつくなるべし・これをて・字お君の装束ともう・あるさ面うたちのやうを出う
大納言君は・いとさてやうふ・ちひさくつきうたなる人の・ふろうふ法
くしけふつふくとこえたるうを・それとおひやうふ・うこたけふ三寸ぞ
うりあるうたる・すおつき・髪のすおなと・おす・へてにうこのなく・こぼれ
うつくしきう法を・いとらうくしく・こてなしとらうたけふ・ならひ
うなり

おふ装束のうをんひて・ろふ方うて大納言君のうたちをんうつふくとは・
さんくしくなり・すおつき・髪のすおなり・うんさいふおのい様か・髪のさしさ面とん
ふとうて・本の枝のさしたる方を・枝さしとんひ・月の面をさしてつるさ方を面

なこさしなといつたらひなり・さんそこれそ額の係う・項の方人髪の生の法り
させる本のさ面をいつさなりさ・とうふ・なりさてうつきおて勾なり・うは
さ・こてそこ屋もんとらうたけふ・まてなしとらうくしくなうひうなり・とを
てをことなり・らうくとらうたけふ・うふうつひあなにもやら
うたけそ・アイラニキなり・ならひうは・ニナヤカなるさ面なり

せんしの君は・さやけ人のふと・ほうやふをひえて・こみのすち・こ面やう
ふさらうにて・たひさうれすおうあまり注て・ふとんそ
つうけふ・さをなく・あてなるさ面しう・おらうさしあ申さて・学れ
そしたをとうふそうんつうひせうちちに・あてなる人そうて
おあうめと・ふさ面・をうちの注つもたは申

らうじ大納言君のをいふ。このごろれうの女房のうたちをいそ。そのひさるなきにやとこつ〳〵ころしとそうしてそあるうしにいふ。この依者のくらしらぬなうたなどをやいふをの得うまでふをもあるに親なうさしあうたるとはあるとつふ名なうたれをおやある女房たちのことはそのあるきさしてもそんとさへをひてまつ〳〵そしれはいふおやとてもれ文こまをのことすこしもうたに十分なうぬことのあるいひ作しと云るにてれやある人のうへはあきことはをあさてさたの云るうの九作をこふれひれけるなりとれそれたり

宰お君小肥三位のらふ〳〵うにいたんこ活ろうとくしさうたちしたる人のうちおなるらうもえまてゆくふこらなくうち活おれ君らとふ云なう影女の侍注ふ輔正とにて活めうとふ云なうこをいふの心うおるやけ申そしいこめうをう倍れるにてよるへしうちおるこふ小もうち云方を倍れるにやくちつをふうそ口モトにまう後ふ。

命のらさ活をくちつをとふつとふ実なうそつうけさふ上のんそつうと同しふ〳〵くふ美々しくのまうなうへしんうつ〳〵そかふユラシイキフンとふとなうへしとそ本寂いそれうしまたそれをなそそつうき本ふ宰れ云のそうの

しく品よさ侭なり。また年のほどもの
なたのそうう〜さなど〜しくとれそれ
なり。　小枕。数珠。輔正。小枕のれのちなれそ世人さゝ
きはなり

こがね君は。松こそうとふくあてふな侭めうう。二月そうの志たり梅
ひさ侭〜なり。やうたれいとうつくしけふそそなし〜んかて。んそ〜なとも。
ろんとは。たもひとろうたもなきやうにそのつそをし。いとうをそちうひ。
あ侭りえそ〜き侭てこめ注〜り。ちうきたなき人あ〜さ侭にもてな
し。ふひいつる人あ〜はやそ。そしかたれもひいりて。身をもう〜なひつへく。
あへふろうなき本つん注〜るそ。あ侭りうし〜ろめたけなる

二月いろの志ろき梅。か若菜生に。女三の宮を十に宮か。人ろうけかち
ひさくうつくけふて。たれ松のこあるうちに。にほひあるなうたそれられて。た
たれとあてあふをうく。二月の中ほと十日。いうのあをあきの。とつふ志たりは
しめたる〜んそちして。雪の和風にそたを。ぬへく。あへふそて注よとあり。
いつれもあへうの志侭なう。ろんとそ志。行をろつうのんとていふこれるう
たをなきやうなるやうよこめれそ。ろめこさなりうきたなる人そ。んのらうぬ
人なう。ふいつるは。ムシソ。なき名なとの数ふのとをなう。ろうなき理なき
にて。リクツナイなう。おのあろうえろ〜さまてこめろたるたやしふうし〜ろ
めたけい（ウシロメイタ）後目痛けまて。キツカハシキ侭をふこれまて。こかね君のさ侭なう

文内好そ。又いとさらけなる人。たけくそちふとなるうおたさ侭す

うたつきいとをもくくしくかきあつめたるやうにて
さけとそをぬれうへいとをものさらけふうひくしくなりたるやうにて
のあをひさろをなと人かすくれたなり
を。あれをものさらけとええてそなやうふあんまうつきたりにを
てなくてんさ海なとをもやすくつゆそうふいつるさ海ふをうーろめた
ふうたなくすへてさうをあーめと人のなめーにーつき人うなえん
うう。らーぬくうたえなー
をうーけとそ。とそーかーんうう。ぷを得ふう。父のあそひつまに父あれとん
ふと。父のさうになしいうくをいつへきさや。あんきす。今ひふとふつく同。とう
うをや抱かあたりをとこほしちるあんきやうなとそたり。えんがりいほ

さーふえんなーんとゆそつるうふ海らーぬくとほさーにらしくしうんとも
てたたさ海ふしそうたなといたくあうにあてなーとあるこれなり。うひ。
妻かのうたやこもちへし。数かさ志うまてこれをしう。まてこしをしう。家内佐のさ海なー
式紀のれをとは。れとうとなうふんとふくくけさすてれえた人の父ん
とろくふほひて。うほそいとてそ海うふらーてある。うみをはうしくくうる
そーうてなうくはあーさるへし。ほろひたるさーて。あかをまるふ
とうなるやうたんのれとをうけあを作うーうれ。海ひたひつきたと。
海ことふさらけなりうちろくたるあんきやうをたほう
れとうとい。家内佐の井なり。ゆえらーありけなるやふはく
ろひたるさーてて。なうくぬ髪をまるさ海ふつろひたるをて海ふ。

かう。平中納言の君。伊の子なるかこの人の婿にしてうつくしう。うつく
しかりしてをかしかり。紫式の侍従にて惟仲をはえれたるハ晴なる女にて
額のひろきをいふまりハ目後なりつてそを言ふてそらしとりたてゝす
くれたるうたなりをいふ。詞本義ハうはまろしと見ゆる様なきなるべし。顔
なきをすをなしとりてあけといそれける。あさ師もハたちたつき師の。君
しきをいふ。すこしあ侍りてハ身のたけふなり。これまてみ花奏の君なり
たまといふ人。かれとなうく侍りしむすはらかきてうりとれ君のこと
ぢに。かうはさにゆうふて経さとゐして侍るなれ
ことちふにゑさにとは時。変をしらさるをのたとへなり。この女房。さうしは
らかきうりとふうしを今は。あつくへもやめて。ひたすらに我なくてなるすた

のこさにありて里居したゝなくくやしくまむしきさ君なるなとふらえ
てうくたとへていへるなり。本文は史記ニ藺相如曰王以名使括若膠柱
而鼓瑟耳括徒能讀其父書傳不知合変也と見えたるゆとの
君なり
うりいひくてんをせきうたう侍りし。ふれをとうくふれとまろ
きをかし。又すくれてをうらんれたそくうと申君をとらしをうし
ろやくさとよれく具はらなし。さ扇くいつれをるとるてきこそほ
申るをたほく侍る
んをせそをすうたるさちとらをんせの詩れなるはをそうたしとなりうと
どとうへもど文字をいれてよくしをしハ統なるもでもあらんさ扇く

ナーうぬパげーうあーぬと同例なり。又うくうてげーさことをいひて、
ロアケシカラヌといふ意なり。と雅語訳解にみえたり。これはいけなーとさけてと同意になり。たはうけなーぬさをたはうけのさでうなんてをこうなーぬさ
なとへるとれなしーたくひなる事をもいふなり。
いれんとも。まろんへるなく。さそのをか歌息の意ありて。サウキャアといふ意なり。
を取義もくこう物そ上の條くをうけたる詞と思ふ下の條をうていえんかは。
ことゝもうれとといふなりといえれかさうにはれもそうれなり。上之
うくこゝ家のうえさうれてなう。うえん人ゐひさたもへー。さ女院に賀茂社
女院なり。このころ紀伊。村上天皇の皇女選子に大斎院と申しにこれなり。中務君。作者部類に女院長
官為理女とある。これなるへーれとうえんかさかの中務の文のさ面をと
すべて。まつんへうなう。さを今世のんかはれこうふうやうなれさて申れ

もろ〳〵さかしらかすかなてらてふをなー
ろさにそゝりてをうらうらしくなりうらしくいう功者
ラシイと推語訣解にあり。不は。女院をいよ
さふ〳〵人をそゝへていとかんかはこのえ法ふるとなりの人かうう
ゆをこうれえ法さう〳〵をつまかりたちてえる人ななー
このえ法ふるとなりの人え中えうさの如房ともなり。つまかりなちては。
女院かつまにかりたちて。そけちめるく人ななりて女院をせそなれ
なうたなれそなう
をこうれ申つくら。申えあるを明。花のたうほそれにのたつを
不にまりなまは。院はいとれんのゆるたそて。不れさ法えれとらは

なれうんさひたり。又法きまることとなー
おのつまかりたちてえる人せなー
にまりたまいとふえなりさんとかまれ。
まりたなり。院そは女五をさまりてんべりれんのゆえたそて。
枕草子こやほの不えの源に女院はつこふうけをとをう。帰て。
このころはれとめてなーとまひてこの大女院れと名たうれそまた。不
れさ法とい。花鳥餘情に。雅喜式さゝ即廻帰。便畄野宮さゝすれを
ち。紫野の野文へ入給ふとなり。紫野のさ法なり。さして。世そなれそこん
へり。うんさひい。おふりたさ法なり。又
て。次こそらーをれて。

不のさ法数年平にら

うへふ海うのほうセ給ふ。そは。屋なんまあり給ふれとものなるなと。
そのさそうしたをうとを海へ〳〵に
そは。中そのうたさ海ゐさとのつまかたほるらを以て。うへふさ。
禁中にて。帝れ以下ふ。中そのうたさ海ゐさとのつまかたほるらを以て。うへふさ。
て給ひ。又はうへのれとのおせさせ給ひなとうく中そのれ言にて。海うことと
されほ名しともうの女院そ海うにさうしをうとをなしとのり
ととほけ。れのつう〳〵。うこのむ本となりぬれは。えんなることくもをつ
くさえ中に。なにのあうなきんひすくしをうは。し給へん
をてほけい。我このむすちにモチコンテなり。うへい領知する言あて。栄野の女
院の一う海へを。我ものと領知したることさ海をいふなへ。このむ本いうな

とをもしめうろつえんなるうたのとをこの海へくする言なり。この言い世
そなれて。おふ海さんぬ栄野そたりにてい。うこのむすちふモチコンテ。たのつ
こう。そのうをを。外知したまにて。えんなるうたのとを。この海へくする本
となりぬれて。とふ言なり。さてさうの言あて。えんなるとくもをつくえん
中になり。つくえんて。しつくえんの言なり。おうなたい。奥なたあて。奥ふうう
ぬ言。浅うなる言なり。れひすくしをうは。そ中そのうたさ海あては。ま
たうとをたほく。外院にて。さうとうともなくて。つまにかてつけさなしを。浅うう
なるブテウホウなとい。せし。とふ言なり

ふうんとうも礼本を。をうれしたるんまにて。うの流に海うれ給へは。そ
こにて。うぬをとこにいてあひもれいよとを。人のあうなる名をれい

そせに。そのほのたうのほそとものとんひなゝふれあたうことなく。をとこ
も女そんと海ーさゝともなれかうふうちとけ
されと。海てゝろき人のさをうけて。サウヤケレトとなうゝろひは。スレ
アフたう。そのれうたうのほそとものハ女房。后のれ局とをいふ海なう。そて
うちとけの下に。ふるゝになりなとといつゝの採なるなゝへ。うちとけとみそに
ては。されとも。次のゝのさうひとなく。むけふさゝぬとなり。又ふひさしてふくあたるゝ死さ海とーてもうちとけてなとあゝてそとの
それさは。うちとけたりとふふつゝて。海てゝろ死人のさをなれともそ
内となりのあろさ海にそたくれてらうれなく。とうそつーては。あうなさふ
るまいるあり。とゝ云なり

この。ふうとゝて。なめうさをは。れんとあそくーとたほーめんたさは。す
こしゝろしーうゝんと。忘ん人は。たほろけにてをれてゆ仏ーに
これうゝ下。衣流ふもうゝて。我うさ海のことをいふ。この。ふうとゝては。中そのれ
あろさ海とゝては。忘なう。なめうさをは。ま仕の女房とゝのなう。あそく
ーとたほーめんたれは。あそめにそ。ま仕をいふ。帚木まにあをめにくさて
とをあり。すこーゝろしーうゝんと。忘ん人は。そつうゝるろーうゝんとふいた
る人なり。さうの人は。ふうれもあれは。たほろけまてはれてゆとのり。たほ
ろけまては。一トふりニテなり
んやほく。ものそちせに。とあゝんーうゝんのなををーをぬ人そた。
となるんをせ。のふるゝなくやは。たさうの人それやほ海ふ。たちら

りて。うちうたゝ一は。中ごの人。うまれたりとはらふんなとを。
もんひ給なゝ一
これを。あのらうんあるに。紫て。らうの
んたくにふをいふ。そのまちせに。竹を。ふれそすちのとなり。そたいも
たゝて。さうの人ゝても。ゐたなり。ことなる。んをせゝとは。らき人ゝを。おむつ
うきをうなと。んゝ一ん人ゝふ。ゝうなりひて。んをせのふることもあれと。さや
うに。らうんなき人のさることは。ゝ。ゐた。をうか
ふれては。んをせのふることなきことはあるをうとおうといふ。えなり。をなる
んをせは。一トおりナラヌんをせにて。ガー。ゆる。くゝをこうたのんなり。ゝなき
ゐふ。中ごなとゝは。ゐらうて。せをなれなる。妖院ごうハなふことも。を

うなくたゝ。ごなきをしりごさるゝとふ。この人の。ゆうなとありて。妖院に立
ふうて。中うたゝ一はとふう。中ごのさといふの中おをそゝめ。をたりの人の。ゐ
さうのらうんなき人をのそゝて。おかくいふなゝ一とな。をゝ中ごうた
れらうんなき人をゝふ
上らう。中らうれはとおく。おゐりひきれう。さうすめきてのみ。ゐるめ。さの
みして。ごのれたゝ。おゝうとうにをあゝは。えそうとを見ゐう。ことを。
うくえうて。ゐうをゝと。人ゝをゝ系とりくふて。ゝら。なう。たとうゐさる
ことを。ゐうに。そのことと。とけをは。うのことたくれなとを。ゐるめるこうし
さうすめきて。ま。ゝの情ゐふ。上手をと。ふう。けふ上ヒシメクさゐをゝふなゝ一
し。侍ゝふは。さうそとあうて。僧都とうたゝ一とゝれうふるや。ま。ゝ。ゝのさう

すにしても、私す文字たるうきは、あまりひきれりてあるは、中
宝の山方ゑ、飾かなる言ことをは、あしてえそしをことなりとのり上篇、中
篇なとは、分ゑ添かつけて、らにほとふあら而字をいふことなりとは、
芳のみやたくさの人とこの上篇、中篇のおまりひきいりてすめきたる
なとをいふ、仮字なれとは、此字なれとも、こんなとういうの中ゑの消息
おうちかこれらのお房ともを、えらせんつるなれとなり、人そきぶ
しての情芳はあしとも、こらにさとはかしとなりそのときとうくかて
とりよとを、取しても、そしてこれあり、私とおまりにひきれり
たる人をれふ。　さます、彩字宝にる　とけ生は、彩字にる
されとそうとたふ、ねりうなしんとするたち仮るめる世に、えくる

しうされ仮しんをれとうたそ
うにもぞれと見仮
まあたつは、ドクジツメカスなり、せふの下に、上篇、中篇なとの、といふ詞をれて
んうへしうたそなしんい見そしてこれ、フツガフナといふ意なり、添注拾遺ふ、
うたそとうける、姫名張って、注そこれふしたりて張れり、多の尼羽うふ河
なしそうたそとうけりまと見そ、たり、太うたをいすへてのタイテイヲッく、な
さけまずへてなさけとりふをいふうふんまへあるをれり、今世にめみうつくしむまのてふおられり、
そしもなさけうちのいろにもそれとそれ
れし、あれなとりよだなしまされ沢なり、これ、さいおの上篇、中篇てあまりに
まてなしてうにほとふあしりとのり、もがれいれふ意の詞なり
さしは、文のれんあり如本なくうらくしくんにうたそうまた物を、あ

さうにおいてさせて話されんふなにとも心ひいてたゝんとう
ろやうくそちなる人は世ふつたそをのとたほゝなゝいたりけゝ物
のをうなと中さなることゝ心てたゝしたるかはたうたるさなう
うゝ
さしは、この後心うゝ、ふうゝところそこはをゝ語ふうなゝ
ゝ師そくこの抜いとうゝ、あゝにさはとあるゝきあなう、そつ心てにいそんゝ
にくたゝゝたそものをとんつゝものをいんひさゝてさふゝふ人ともものんえあるゝへ
ゝとふ云をふふあゝそ次ふゝしられをふいうゝくの申あゝうとゝ中まのれ
さ海をくそゝんつなゝんたくそもそれてうけ文なれいうせほそゝん人ん
えあ海へゝとんそれなう、あゝ本なくは、フクナ本なくなうなにともれ

んゝこゝふは中まのれんふ、お房をふ、なたともいひ心ゝいそほゝてあれこゝとゝ
ゝたにおて序たなれんなゝえをまうゝしさるふんさまのほとをうける文なう
さんそ、おふふれ、茶ふつけて、あさつふらうんれくゝひんせたゝんとをもうゝふ
たくそちなき人は中まの学ふたそものとれほゝめゝなゝいたりとなうう
ゝろたくふゝうんれふさゝまを、人ふゝてゝ、他とも思ひすたゝんたゝてふ
さまをのふそちなき人はそちをそも思そぬ人なゝ、けふさゝ式をうう
へゝおしをうて心うなゝ、れんれうゝ、次のうたなることをとふさて、ふゝ上落中落
のあまうさゝまをなさけなうゝにともれとのゝ、又さゝすなて、中さなる
とゝ心てたゝそとんひてゝたうたほふ、あゝ上ほふきさあをとうゝたり、
次ゝ、これそのんをゝをゝう

ことふうとうれなる人式ホかつけてそのほなるうなる面しかく
しることも拘のをうにはひいたり中ごのし なさかたほとふた
そまして、らふなそうこうたえなるとき、ことなるとろなくてすくにをたためやをきことふたほしたれけーさに、
うちこめんたる人まにめとそは、これんとらそ、ろひ文えませたるほと
に、ろくはろいにけるとそ、ふえて作る
ひかくしさとい、ひとたなさ海のとなり、ことといことをを温れたもまた
れとをさなきとい、神文元年に生れ給へて、ことと
し、寛弘六年 高ふたそーまたに式部をまはのそーめは、寛弘三年なるら
し、一の巻にいつることくなれは、それはた一にたそーまたを、私をさな

しといつるか、寛弘元年のほに、頼通云々をおさなー とつるを、十七のさうのさ面なり、
今世のんまては、さはいふ海ーくおそれるれとも、ろの二になふたるぬ児をる、この
ころの書ふは、そうとんーれえ、そしれとも同ーたろいにもまれとをさなーとも
うにそうふはねーさしれえ、ねそすぶ式部の中文ホあるうさうし、おつたのほ
とふ、世の人式、されんさまをーまして、ねう走るなとをさてーるにもるへし、こ
とならとられては、ナニトモナイサテテとの二ほとの名なり、ぬやにきは、フナニナ
こしの名なう、こめんたらいむにめ係りこれひいか文のれんさ海ホなう、ねうい
にけふこれんさ海ふつまになーひたるまて、あの上義中義のあまうこさなる
もそれふなーしたるれそとねをそるとなる
いうは、さうくねとなひさせ話ふ海ふ世のあへさ海人のんれ多にと。

あしたをすこたちもとゝゝおろかれたるもこれにらんしゝゝ
とゝゝ廃止人をなにをめなまとゝゝとをこゝとをれしゝとゝゝへうゝ
めゝことゝゝろしめんたり
にらんしゝゝとゝゝゝろしめんたり係まり。なにをゝゝ廃止人なしゝゝ女。そほう
のことゝゝふゝゝなり。めなれては。つまにりたつゝゝ方なしそなり
さりとゝゝんにゝをありそつせは。れとあそつけんこともそく
風おうゝなさけなくひきんれたるこゝゝしゝをあゝゝんとたほしゝの
法そ注生とその心ひなほりうたく。又いまゝれこんたちとゝゝふをの。た
あるこゝたおゝて。あるゝゝり。これまめ人なり
さうとゝゝい止のうちこんなん人の眼をくうくなゝひにけるなとゝゝあるこをゝ

けていゝりゝれてるおうゝゝゝうゝしゝてもあゝゝなんへ係りていうゝしゝてもあゝゝな
んとは。例ふなゝみかくひきゝれたる女房なとは。おふふれて。あそつけんこ
ともゝれそきたゝゝうゝにゝてもあれゝしゝとゝれほしゝのほそほをゝゝさるは。
心とやさなゝれほとをそあれ。今ハやうくたとをひさを招ひて世のあるをさ
ま。廃上人なとのしゝくふらをゝ。ゝろしめたまハすこしハさ
ふてもあゝゝんと。花宇めにおをふなるへしゝさゝれとおとうゝれなゝひのなほ
りうたゝて。それひさゝりてあるなり。抱うゝとゝゝふ頃それつくをゝれおなう
とゝゝふ気なりゝんたちとは。抱あ。浅茅のよ息たちをゝふなり。さゝれとみ。ま
曙杖に抱氣。大臣の息なゝゝてゝ。通称かおすおを入て。納言以上の子る人
人をゝふなり。とゝゝゝいつれもとゝゝやむとをきこうたの若ををなり。たあるこうた

八胡蝶などにくゝのたるゝをゐ玉のを枕捕虫にたふしと書へゝたれか
同作とせるは誤りなり。とそたるとは同作やさしとまめ人なりといへる
とは表裏なりんくうそ一はたふるうたてまことはまめ人なりといふ意さ
うに女房なとゝ云さうにてえんふな酒めうそうたそたるなりといふ
にもやまめ人は下クシツモノなり。按らく考ふへし師そこれをあた人なりといふ
意をまめ人なりとうちへゝてうをいつにてそのことをつらくいるゝをあらは
るといそれかう
無流なとやうの系にて月なとも見花をもめつゝいたふるのえんなること
はたのつうゝもとめもいてもみゝんあさゆふたち沸をゆうしけを
さとなふたてことやうをそらせうちいをうはやうにことをもいれ

いうはゝれてゝゝへそちなうにすへき人なんふうたくなりにたると
そ人こはいひゐるゝうゝえ見行ゝぬことなれそそらにうし
もとめもいてもいふゝんとは我んうよとめいふてこいふゝんあそ無流う
なの女房ともゝのうのたふそうたそまめ人なる座上人なとにいふゝんなり
おふ系のき酒それと世そなれうんさいたりまたそそるなりんとふをこて
へとうけて見へゝあさゆふをは中まのうたさまなりたてとはえんなるとに
あゝてつまのたそなりいうけゝれ座上人なふいうゝれなりゝへ
はいうゝれなる女房の昔なりん人こはの人そ座上人なとなりそうゝえそ
ちなうにすへき人のあるや、なゝや座上人なとうそにゝへそうゝはえ
ぬとなれはうゝほとなり

うめうに人もたちうそうなたゆうに
てんをあやしうにんとうそうまてをありぬへきことなり。これを人のんあり
うたてとはんかゝるめり

ゆうにんにんをふ係りにんをふいたちうていひたる人のとみふさん海
しきや文なとゝ抱とほさうたのことをいうにうへふするをつふめ
やーとはふうんう海きとをいうへかすするうあやしきなりんとうさこもまう
ぬきとはさゆうにふくさいうへせにとも、とほうにてもいとうるへきことなくと
ゆふ云かうこれを人のんきといあふ女房とのすたうちをれ入たるまて
こうんひくてんせそうたうかるうーとんへるゆこれにて、疾流うたの女房
とゝ文の女房とうそうへてとんとをのすうれて、紙なきいかゝと

かうれ次こにをいへり

なとうゆうにんをれをにく、ひきのりたうんかーこうんゝ又なとて、
ひたけてうあうひさんつへきそ、うにほとふをくのあうさ海ふー
たうひてよちひんことのんとうたきなるへー
なにそは面にそまし、んの奥ありけふひきいうたる人をにそたなそそをん
ふひたけていまの小根小佐をに、とうーするなく、まとーたるとみとなうと
えをたうよちひんいんーとさなとなく、事本まに三史、お経のこちくーに
うたをおきそうにさとうあうんそうあれきうなうめ、なとうい女といえん
うに世あるとの、れほたけをたくーにつけて、むけふ、うにんにたうにーをあう
んというと云うらーう

まつは、齊信卿文をあつらへて、文ことあり。
とあへるに、こめ、ふ上ちうなたちは、だいめんしをよこすとうたゝ、又あいて
も、なにことをもろ〳〵くの物をよこすとそのたまふことを
あるに、んのたらふやうにをよこすとおもふに、ひ
うことをせ〳〵をあんなく、すへてきうめ〳〵と、ほのうなる事をひをも見
えし、ほうの人はさる物〳〵さなるこうる海らひなりぬれは、こうなきあ
て人をこれらふしたうなるを、たゞひめうみなう〳〵のもてなしにを、これ
うのし法よ

さは、中文まの、中ふ、啓にてまことのをうにまありたるふんてのふ女房た
ちのあへふこめきて、いようひなるまをひをも見てしと物うと、ほのうなる
に、猶物あるへし、そらいこれまて、中文の如房のいふうひなさをんひて、次
のほうの人はさる物〳〵さなるとは、中文なう〳〵ぬ、今我ほうの女房をはさやう
にいふうひなるをあるは、とおもふなれは必そのさうひあるまことなれてなう、そ
ろそにいそ、あんなくすへてきうれし、ほのうなる事をひをも見てしと物うと、
きうをもそてしとふ法、得うなとあるまうまえうての海らひなり、まて人は、貴人なう、こは、接性いやう〳〵女房人のむ
すめをいへしらにしたるふ、世間のありさ海ふ法なう、ひめうみなう〳〵のさま
とは、ま法ふてたう人おても、我親のさとふ、所君にてふしつれなるさ海
にてのそかりとなり、海そく海らひの下に、と文まありつ〳〵んを、挽一なるな
へし、海らひなりぬれといひては、何とのそをとふそれう。　あんなく、まかに

ら。　作りさなる。新な家にら
下らうの学あるを。大納言（道綱卿）公らうへにと思ひ給へたなれは。さるへき人
とにまうでつ。ほめなるをろうなれと御かさするをりくは。たゝめんする
人なくて。まうで給ふ物を作るなり
さる人とは。上中流のあひたをいへり。　給ひたなれは。新な家にら
そのほう氏うんたちも。実のにふたふよりなれ物をとけ出させ給ふよは。た
のくの。ふるの人。なのつうとりくか。ほのーまて。その人なんをうは。すさ酒
ーげふおひて。たちんつる人のこふふれて。このまゝたりのことうれたり
なといふへらめるをかとろうに作る
ほのーまて学あへとも。給ひたなれは。新な家にら

なとろうへーにをねなにるひさいろうなーんろかこうへんと思へるを御
ーてふるゝ。　なのくの新なにら
疾病なりの人をこれをたとめあるへーさうとして。ろう方のことところ
ろう。ほのの人はめをえるへーとそれもひあをつ
らんを。えろうなれ
これをいおのふひなれ女房とその子供ろう。たとめは駄（カ）めなう。ろう方の
ことところ。我方のこふあろうつれてを。文学統（カ）行不
義いれるめをえるへーに用にもえるへーとうなれとうとして。我方のこすられたりといえんをみろうな
とうは。ふ。今えんとうにてこらろうたろうまるとも作りたその

とゞけれかうのとたく気とつるれなう

すへて人をゝとくうたそやくくうくをもちひんことは、うたうへんをさを、

さはれなとて、まろうれさうた人をなたまなー、与をうーうほとふんの

きはのことうえあーうるれ

んのきは、陽生ーんた大小功世なとなく、ゑに我うたさ角の如房のいてうん

なたをまついひてあそ、秋虎の中れのうれのまれーて、んふうたさ角なる

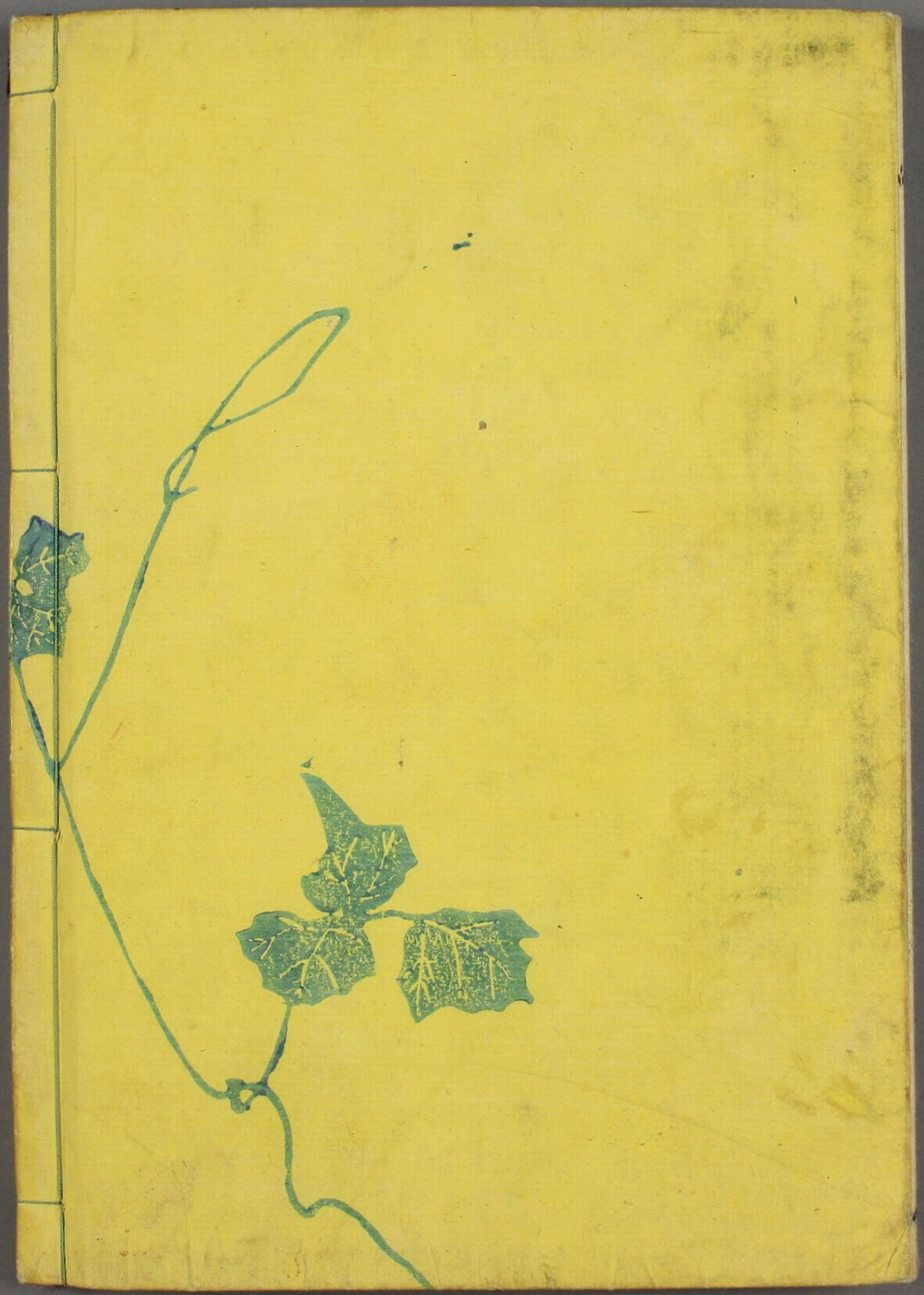
にあうて山ア、きとふ出るやう、三更も絶のこちくーたにまさうて、ゐたた

うたよくなん、ゐとうんそねせんは、むうーたふあうたうーなう

けり、帥て今せを

んとれらんせをはほうう作ーふこうたれ人のうえーねきたりける

をぬすみて、こねふえをて、とうえーう作たーしい孫たうてを

れらんせを角ほそこのとうたてやる、あなたの人になう、孫まうい式於かえ

せたれとも、とうえーたるう、孫たーとなう